
地獄に落ちろ！

コメディー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄に落ちろ！

【Nコード】

N4725F

【作者名】

コメディー

【あらすじ】

ヒトラフコウニスルコトノデキルショウジトソノオバアチャンノハナシデス。イチオウホラーデス。

地獄に落ちろ！

古川絹枝は今年で九十歳になる。年々に伸びて増えていく顔の皺と、禿げて少なくなった白髪が、これまでどれほどの苦難を乗り越えてきたかを物語る。

そんな絹枝は、たった一人の家族、高校二年生になる孫娘、辻山征子の為に、得意の和食料理をこしらえながら、その帰りを待っていた。

今日、征子はバスケットボール部の練習があつて、きつとお腹を空かして帰ってくる。

絹枝はそう見込んで、精一杯に料理の腕を振るつた。

そして、天ぷらや、土瓶蒸し、野菜と豆腐のポン酢サラダ、ナスと鳥そぼろ和えなど、色とりどりの美しい料理を作り終えて、食卓に並べると。

「それでも征ちゃん遅いわねえ。料理が出来るまでに帰ってくると思ったのに……そうだそうだ、確かあの子に言われていたわね。何かあつた時は連絡するようにって」

絹枝はそう独り言を言つて、壁に取り付けてある電話の、その隣に吊り下げられた電話手帳をペラペラと捲った。そして、電話をかける。

「ああもしもし？征ちゃんかい？」

「おばあちゃん。どうしたの？」

「いんや、料理が出来たから、帰っておいで」

「ふふ、調度今家の前よ！」

征子がそう言つと、すぐにガチャリと玄関のドアの開く音が聞こえた。

「あら、お帰りなさい」

「ただいまあゝ！」

二人は廊下と食卓との間を挟んで顔を合わせたが、まだ電話を切ろうはしない。

「さあさあ、料理が冷めないうちに食べなさい」

と絹枝がそう言って料理を勧めると、征子は

「うん、ありがとう！」

と返事をして、食卓に入り、

「わあ！ 今日私の大好物ね！　ところで電話切った方がいいのかしら？」

と嬉しそつである。絹枝も微笑んで、

「そうね、征ちゃんの好きなようにしたらいいんじゃないかしら？」
といった。

そして、二人は、電話の必要性の無い会話が面白かったのか、明るく笑うと、丁寧に電話を切り、そのあとそれぞれ食卓に腰をかけていつものように色んな話をしながら、楽しい食事の一時を過ごした。
「…そうそう！　お婆ちゃん！　私、今日男の子に告白されそうになっちゃった！」

「告白されそうに？　おやまあ、征ちゃんも年頃だものね。でも告白されたわけじゃなく、なんでまた、されそうになっただけ、なんだい？」

「う、うん、告白って言っても、たぶんだよ。だって一年生の子だと思っけど、真っ赤な顔で、恥ずかしそうに放課後に校舎裏で待っていますって、言われたから…」

絹枝は征子の話を聞いて、少しだけ悲しい表情を浮かべた。それは、征子の心の奥底を悟ったからだった。

そして、柔らかな視線を征子に向けながら、

「そう、で、行かなかったのかい？」

と言う。

征子は、自分の気持ちを絹枝に見透かされたことに気付き、告白の話をしたことを少し後悔した。そして、出来るだけ明るい声で、
「い、いいのよ。だってその子、私の好みじゃなかったし。それに

私その子に校舎裏に行くなんて約束してないもん」

「そうなの…でも征ちゃん、その子のこと嫌いじゃないんでしょ？」

だって征ちゃんの顔に本当は行きたかったって書いてあるもの。

ただ征ちゃんは優しいから、また人に迷惑かけたくないって考えて、その子との距離を置いたのでしょうか？」

「…おばあちゃんはなんでそんなにすぐに人の気持ちがわかるの？」

…私もう部屋に戻る」

「そうかい？　ほんと優しい子だね。征ちゃん」

絹枝は人の気持ちをわかることにかけて、天才的だった。人の心を読めるとか、そういうものではないが、絹枝は普段から相手の立場に立つてものごとを考える性格を持っていた。いや、性格というよりは癖と言った方が良いのかもしれない。

なぜなら、道で誰か人がいた時に、絹枝はその人と自分の立場を入れ替えて、物思いに耽ったりしてしまう独特の癖を持っていたからだ。

その物思いに耽る様子はとてもユニークで、相手が買い物袋を持っているとふとこんなことを空想して、物思いに耽ってしまう。例えば、スーパーで買わなければいけない物が置いてなくて、今は別のスーパーまで足を運ぶ途中。

帰るまでまだちょっと時間がかかってしまう。けれどそろそろ日が落ちてしまうから庭に干した布団を早く入れなくては、と絹枝自身が心配にかられたりするのだ。

こんな風に、その人が本当にそんな状況であるのか定かでないことまで想像し、自分で本当に入れ替わってしまった錯覚を起すくらい想像力を巡らせる。

また他に、電線に鴉が泊まっていて、自分とその鴉と立場を入れ替えて、自分が生まれた時から鴉なのはさも当たり前で、いつものように電線に泊まり、バランスを取っている。昨日いた隣の町とは少し違う静かな町の景色を眺めながら、仲間のことや、獲物のこと、それと他には周囲に敵がいなかったかと心を配っているのだ。

そんな癖を積み重ねてきたからか、絹枝は、相手が見せた表情や、声の調子ですぐに相手の心に気付いてしまうのだ。

そして、時にはさつき、征子がそうだった様に、相手が知られたくないことまで気付いてしまうこともよくよくある。

けれど、古川絹枝のその読心術で、大きなトラブルになることはない。むしろ問題なのは、辻山征子の天性に与えられた人を不幸にする力だ。

実は、さつき絹枝が征子に『また人に迷惑をかけたくない』と言った迷惑とは、そのことを差して、辻山征子の両親がいないのも、その力の為なのである。

征子がまだ中学二年生の時のこと。征子のクラスで、五人もの生徒が立て続けに死んでしまうという奇怪な事件が起こった。

……三年前。

その日は、征子の好きな梅雨の時期で、曇り空だった。

今にも雨が振り出しそうな道を歩きながら、征子が思うことは少し変わっていて、空と自分はとても仲が良いということである。

だから、征子は普段雨が降り出しそうな時に、道を歩きながら天気と心の中でお話するように

「今は振らないでね」

つとお願いをする。

すると家に帰るまで本当に雨が降らないで、家に帰ると突然雨が降り出すことがよくあったのだ。

征子はその日もそんなお願いをしながら、学校に向かっていた。

傘は持ってきておらず、理由は、征子にとって雨が降り出しそうな時に傘を持っているということは、振らないでねとお願いする天気に対して信頼を崩し、失礼に値すると思っていたからだ。

そうよ。天気との信頼関係が崩れると、天気も崩れちゃうんだわ。

そうなると雨女の一手前ね。

そんな風に、征子が自分しか通らない変な理屈に納得していると、学校の近くで、クラスメイトであり、親友の中山しのぶとばったり

会った。

そして、しのぶは征子に声をかけてきた。

「おはよう！ 征ちゃん！」

「あれ？しのぶちゃんじゃない！ こんなところで会うなんて！
何年ぶりかしら！？」

友達といると、すぐに冗談を言ってしまうのは征子の性格だ。しのぶもそれをわかっていて、征子の話にいつも機嫌よく乗ってくれている。

「あはは！ ホント！ 365分の1年ぶりよ！」

中学生らしからぬ見事な返しだ。

「朝から見事な返しだわ！ ねえ、私の教科書全部あげるからそれ
私が言ったことにしてくれない！？」

「いいわよ。じゃあ学校ついたら教科書ちょうだいね！ 征ちゃん
が授業中すつごく困るの見てみたいし！」

そう言われると流石に冗談でも悲しくなってくる。

征子はちよつと涙目になりながら

「お母さん！ 私、立派な友達を持って不幸せです！」

とまるで故郷にいる遠い母に語るようにそう言つて、演技してみせると、

しのぶはそのシーンに言葉を入れてやるように、

「教訓、口は災いの元なり」

と締めくくってみせた。

そんな感じで、今日もいつもの様に、くだらないことをお喋りしながら平凡に時間が過ぎていく。

征子はそう思っていた。けれども、簡単に平凡な日は壊れて、事件は起きてしまったのである。

征子が学校に着くと、思っていた通りに、雨がポツリポツリと降り始めた。

そして、教室に向かう途中で、クラスメイトの林川則子が廊下の角

から姿を現して、松葉杖をつきながらやってきた。

征子としのぶは、則子とも仲が良かったため、その姿を見つけるとすぐに声をかけた。

「あれ？のりちゃん何処に行くの？もうすぐ授業が始まるわよ」

そういつて初めに則子に声をかけたのはしのぶだ。

則子はああ！と言って、二人の方へ近寄った。

三人は廊下の窓の手すりに引っ付いて、三角に集まると、話をした。そして、征子が冗談を口にして、

「何処に行こうとしたの？もし、のりちゃんが授業サボってこれからハワイに飛んでバカンスを楽しもうっていうんだったら協力するけど」

と言うと、

則子は

「あはは、そうしたいけど松葉杖がなかなかそうさせてくれないのよね」

と言う。すると征子が

「いいじゃない。一緒に頑張ろう！」

と、わけのわからない励ましを口にした。

そして、話がそれていくのだ。それをしのぶが綺麗に枠で修正してくれ、話の進めてくれる。

「優等生ののりちゃんがそんなことしたら駄目よ。松葉杖を使いこなして、追いかけてくる教師達を撒いて逃げてるのりちゃんを想像したくないもの。まあ、征ちゃんとはかく、のりちゃんならそんなことしないだろうけどね」

「私ならともかくってどういうことでっしゃるか？」

小さなトゲも征子は見逃さない。細い目を作ってしのぶを睨む。

「それぞれに大事な役割があるってことよ。ところでのりちゃんほんと何処に向かおうとしたの？」

しのぶは征子の視線をさらりと交わして、則子に訊いた。
すると則子は、

「ちょっと屋上にね。柔道着を干しているの、一応屋根のあるところで干しているけど、雨が強くなってくると濡れるからね。それを取りに行く所なの」

と言った。

それを聞いて、征子は腕まくりをすると、

「それじゃあ私の出番ね！ 柔道はしたことないけど、干している柔道着を取り込こむなら5段の実力があるんだから！」

と、そう言つて、征子はすぐに屋上へと向かったのだ。

「あ！征ちゃん！屋上あがるのに鍵がいるの！」

則子はすぐに伝えたが、その声はすでに征子に届かなかった。

「仕方ないわね」。のりちゃん鍵貸して。渡してくるから」

「うん。ありがとう。じゃあ私、教室に戻つて、二人に柔道着のこ」と頼んだつて言ってくる」

そして、則子はしのぶに鍵を渡すと、松葉杖を大きく前へ突いて、早々と教室へと戻つていった。

征子は屋上に出る扉の前に着くと、扉にはいつも鍵がかかっていたことを思い出した。そして、施錠を見て首をかしげる。何故なら鍵がすでに開いていたからだ。

けれども、柔道着を取り込むことが先決だと考えて、いちいちなんで鍵が開いているのかを気に止めないことにした。

きつと誰かが別の用事で先に鍵をあけて屋上に来ているのだろう。

征子はそう思つて、屋上に出ると、すぐに干している柔道着は見つかった。

そして、急いで柔道着を取り込もうとする。その時、征子は地面の様子が変だと気付いた。

灰色のはずの地面が所々赤く染まっている。

征子は立ち尽くした。

その時、校舎への入り口でしのぶの声がして我に返る。

「征ちゃん！鍵忘れてたわよ！どうやって入ったの？」

「開いてたの。のぶちゃん！それよりこの地面の赤いの何？」

妙な沈黙があつて、

「…な、何これ？」

としのぶも気味悪そうに、雨に滲んだ赤い色を凝視する。

二人はすぐにそれが血だと判断したが、あえてそれを口にしなかった。

二人は怖くなつて、お互いに傍によると、その色の流れてくる方へと、向かった。

そこは人の身長よりも高い少し大きな段差があつて、壁のようになっている。その壁伝いにコの字に段の裏側に回ると、そこには思ったとおり、人が死んでいたのだった。

頭が碎けていて、誰だかわからない。

けれども、同じ制服を着ていることから、ここの生徒であることは間違いなさそうだ。

「は、早く先生呼ばないと！！！」

雨の音と、チャイムの音が混じる中を、悲鳴声をあげるように、しのぶは叫んだ。

征子は、怖さで足がすくんで、必死にしのぶの袖にしがみついた。

…私のせいかもしれない。

学校の屋上で頭部から墜落したと思われるその生徒は、駆けつけた警官達の捜査によつて、征子のクラスメイト、前田純也であることが判明した。

征子は警察官から取調べを受けて、その時に初めて死んだ生徒が誰であるか聴かされたのだが、なんとなく、征子は誰が死んだのかを既に知っていた。

事件の前日の放課後のことである。征子は、掃除の時に置き忘れた塵取りを取りに、屋上へと足を運んだ。ちゃんと管理人に事情を話して鍵を貰い、鍵を開けてだ。すると、その時に前田純也がやって来て、煙草を吸うからと言う理由で、鍵を渡せと言ってきたのだ。

そして、口論になったのだが、純也は征子を脅して煙草のことを口止めし、鍵も取り上げてしまったのである。

その時に、征子が腹を立てて思ったことが、高い場所から純也が落ちて頭を碎いて死ぬことの妄想だった。

屋上にいたから、たまたまそんなことを想像したのかもしれない。

その妄想が次の日に、現実となっていたのである。

だから征子は死体を見た瞬間から、もしかしたら前田純也が死んだのかもしれないと考えていたわけだ。

けれども征子はその時、まさか本当に自分のせいで前田純也が死んだとは気付かなかった。ただの偶然で、デジャブの様なものと考えていたのだった。

それから1週間後、騒ぎがまだおさまらぬまま、第二の事件の引き金があった。

それはあまりに些細な自慢話、ただの口喧嘩の類に過ぎない。

征子のクラスメイトで、辻 郁美と言う生徒が、貧乏人の原田好子と言い争っていた。

「へえ、あんた、旅行に行くお金なんてあるの？あんたんとこ生活保護受けてんでしょ？国の税金で無駄遣いしないで、家で大人しくしてたらいいのに」

「ほつといてよ！あんたに関係ないでしょ！？」

「関係ないわよ。だって、私の親はね、年収、億単位を稼いでいるの。その中から税金にかなり持ってかれてんのよ。そのお金であんたんとこが無駄遣いしてるだなんてなんだかむかつくじゃん。言っとくけど、あんたんとこが貧乏なのはあんたとその両親が怠けてるだけなんだからね！」

「うるさいわね！旅行に行くのはうちのお兄ちゃんがバイトで稼いだお金なんだからいいでしょ！」

「そのお金を家に入れりゃいいのよ。まあ、うちも来週にスペインに行く予定にしているから、あんたんとこにも援助してやったって

ことで大目にみてあげる」

征子はその口喧嘩を聞いて、郁美に対して腹が立ち、旅行中、家族もろとも飛行機が墜落すればいいのにと考えた。

その次の日に、第三の事件と第四の事件の因となる出来事があったのだ。

体育の時間のことである。栗原洋子は、いつも病気で体育を休んでいる。そして、彼女は性格が少し暗く、陰湿な虐めを受けている。

その日も洋子は息苦しそうにしている、体育を休んでいると、島根里美と言う生徒が洋子に、

「栗原またズル〜！？苦しそうな振りして、見ててこっちまで息とまっちゃうんだから、やめてくれない？ちょっと！サボるんならコート組み立てて準備くらいしてよね！」

征子は心の中で、里美が窒息でもすればいいのにと考えた。

また、帰りのバスの中でのこと、山瀬修汰と言う生徒が、親に電話をしていた。

「…だからちゃんと録画しとけ言うたやろクソババアが！それと今日はツレんとこに行くから財布から金取ったからな！ああ！？

うるさいな！ボケ！」

征子は昭二がその母親に殺されたらいいと思った。

そして、その一週間後のこと、辻 郁美、島根里美、山瀬修汰が、立て続けに征子の思った通りの死に方で、立て続けに死んでいったのだ。

そのことがあつて流石に征子は、自分の考えた死の妄想が、現実になつてしまうことに気付いてしまったのだ。また怖くなって、それ以来、気軽に死ねばいいなど思わないように心がけた。そして、その時の事故が単なる偶然であると、思い込もうとしたが、ふと、クラスで、威張っている偉そうな奴に腹が立ってしまい、こんな奴、クラスの虐められっこになればいいと思った。

すると、まずは、教師がその生徒に冷たくあたりだし、続いて回りの人間もその生徒の虐めるようになっていったのである。

クラスの間がどんどん自分の思い通りに死んで、色んな人間が自分の思い通りに不幸になっていく。それは、テレビに映る芸能人等も例外ではなかった。

征子はとうとう自分の能力に疑いようがないことに気付いてしまい、絹枝に泣きながら相談したのだった。

その時、絹枝は征子に優しくいったのだった。

「それはねえ、きっとあなたに重大な役割があるんだよ。でもね、ふとしたことで思わぬ失敗をすることにもなるだろうから、征ちゃん是世界一心の強く、優しい人間にならないといけないんだよ」

征子は絹枝にうずくまり、ウンウンと泣いて頷いた。けれど、その思わぬ失敗がすでに現実となってしまうていたのである。

征子はふと思いついてしまったのだ。クラスの間で死んでしまえと思う以前から、ある晩のこと、両親に勉強のことで、叱られ、兄にも怒られて、お婆ちゃん以外いなくなってしまうえ！と思ったことがあったのだった。

そして、それが、少し後になって、現実になってしまったのである。征子が自分の恐ろしい能力に恐れ、絹枝に泣きついたその晩、いくら待っても家族は誰も家に帰ってこなかった。

絹枝と征子の二人で、ずっと待ち続けたが、なんの連絡もないまま、それぞれの携帯電話にもかけてみたがつかない。

征子は、自分が家族を消してしまったのだと考えて、悲しくなった。「征ちゃん、心配しないで、きっと帰ってくるから、征ちゃんは不幸なことを考えるとその通りになるんでしょう？なら今度は人の幸福になることを考えなさい。きっと変わることが出来るわ」

「うう、うう、うう」

征子は泣きじゃくって、はっきりと返事が出来ず、首をかしげて、何度もうなずいた。

その翌日のこと、空は晴れ渡って、陽射しが照りつけた。

それは、中学へと向かう気の重たい征子を励ましているようでもあり、責めているようにも思えた。

学校につくと、いつものより明るく、中山しのぶが声をかけてきた。
「おはよ！征ちゃん今日どうしたの？学校の行きに見かけて、遠くから何回も声かけたけど気付かないんだもん。そのまま征ちゃんバスに乗って行っちゃうし、ちよつと寂しかったかな」

「…ねえ」

「なに？」

ほつといてくれない？征子の口からそう言いかけたが、やめた。
そしてふと、この子も私と同じように…。

と考えたが、あわてて取り消した。

絹枝の言葉を思い出して、相手が幸せになるようにと願った。

けれども征子は、こんなに楽しそうなしのぶを目の前にして、彼女がどうなれば幸せなのだろうかなんて、およそ、考えもつかなかった。

「ねえ？しのぶは辛いこととかあったりするの？」

「ん？どして？」

「だっていつつも元気じゃん」

「そう？そうね、私も色々それなりにはあるのよ」

しのぶがそういうと、チャイムがなってしまい、征子は肝心な部分を聞きそびれてしまった。仕方なく、征子は一限目の社会の教科書を机に出して、堀内先生の朝礼に付き合っただけでやる。

挨拶をして、出席を取る。

教室は、死人の為にあった空席がぽつぽつとあって、閑散としていた。

征子はふと、変に思った。

生徒が一人多いのだ。

人数を確認したわけではないのに、気配がそのことを訴えている。

征子はその正体を冷静に考える為に、眉を撫でた。

それは、征子は何かを真剣に考える時の癖だ。

そして、征子は眉を右手の中指でゆっくりと引いて、終わりあたりで、見てはならないものを見たのだ。

それは、前田修二と言う、屋上で死んでいた生徒の姿だった。

教師の堀内はたんと順々に、死んだ生徒以外の生徒達を点呼し、出席をとる。

「中山しのぶ！」

「はい！」

「前田修二！」

「はい」

「西田浩二！」

「はい！」

「せ、先生！」

「ん？どうした辻山？」

「い、いや、今前田君の名前いませんでしたか？」

「いや、呼んでないはずだが、あ、おかしいな、間違っ。を付けている」

唐突に前田の名前が挙がつて、クラス全員がその席を見た。

そこにはさっきいたはずの前田の姿はなく、気配すら消えていた。

そして、その空席の背景が、征子を迫った。

クラス中に暗い空気がただよって、堀内はそれをつかしようとして、少し大きめの声を張って、こう言い放った。

「みんなすまない！ちょっと勘違いしたみたいだ。でも気にするんじゃないぞ！これはちよつと耳にしたことだが、他のクラスではこは呪いのクラスだとか言われてるそうだが、なあに、もう辛いことなんて起こりはしないさ！一生懸命勉強して、いっぱい遊んで、前のように明るいクラスにしようじゃないか！」

そうして、堀内はいつものように元氣あふれる授業をしたのだった。いや、いつものように、というのは少し違う。

このクラスに死人が出たことを境にして、堀内は変に明るく振舞っていたのだ。

そして、征子が色々なモヤモヤをずっと秘めている中で、その日の時間割が、たんとこなされ、時が放課後へと流れていった。

やがて風景は、スピーカーからの鐘音が放課後を告げて、征子がほとまいつて放心しているところを静止した。

そこへ、中山しのぶの声が入り、征子は我に返って、振り向く。

「征ちゃん、今日うちに来ない？」

「へ？」

我に返った征子は、かなりの馬鹿っぽい返事を返してしまい、それをしのぶがクスリと笑った。

「征ちゃん前に観たいって言ってたでしょ？星の遊園地」

映画の話。

征子はそれを聞いてようやく心が期待して、

鬱から開放される。

「観たい観たい！いいの？」

「うん、この間ね、ママがDVD買ったんだ」

しのぶは得意そうに笑顔で言った。

そしてようやく二人に、普段のようななんでもない話に華が咲いたのだった。

「高山四郎カッコいいから私好き」

「この間はドラマで『いいジャン』に出てたよね！」

「うん、でもあれちよつと怖かったよね。」

ほら、今ってなんでもありみたいな時代じゃん。犯罪だらけでさあ」

「あはは、私達も気をつけないとね」

そんな話をしているうちにしのぶの家に着く。

しのぶは首から下げられた鍵で、ドアを開けた。

「ただいまー！...」

「どうしたの？」

「うっん、みんな出かけているみたい。まあ、あがつてよ」

征子は一歩後ろに下がった。

「どうしたの？」

「あ、私、よく考えたらおばあちゃんと約束があっただ。... 帰ら

ないと！」

「ええ〜！？いいじゃない別に、じゃあさ、うちから電話かけてみたら？」

「え、いや、でもね」

「いいじゃない。入って入って！」

征子は心の中で何かの間違いであるように祈った。そう、征子は今日、学校でふと、しのぶも私と同じようにと考えてしまったことを思い出して、その心当たりに胸を痛めた。

征子は恐る恐る家が上がって、電話を借りた。

すぐにでも絹枝の声が聞きたかった。

「じゃあ私映画観れるように用意してるから二階にあがって来てね！」

タンタンタンタン。

しのぶは玄関の中間ほどに置いてある電話機に征子を残して、上へとあがっていった。

トウルルル。

トウルルル。

征子の家につながって、征子は絹枝に言った。

「お婆ちゃん！どうしよう！？今ね、しのぶちゃんの家にいるの！でもね、私またあれのこと考えちゃって！しのぶちゃんの家の人誰もいないの！」

征子は焦りながら、順序もなにも形振りかまわず、しかし、小さい声で絹枝に助けを求めた。

「そう…征ちゃん、私ね。とっても具合が悪いのよ。だから征ちゃんが帰ってきてくれないと困るのよ」

「え！？大丈夫！？」

「それでね、せっかくのお誘いを断るのも悪いことだから、良かったしのぶちゃんも一緒にうちへ連れてきてみたらどう？」

「え？」

「それと、肝心なことを忘れていたわね。しのぶちゃんがうちに遊

びに来て、帰るのが遅くなって、しのぶちゃんがご両親の方にめいっばい怒られることを想像してみるのよ」

「しのぶちゃんが親に怒られるように？」

征子はふと、想像していた。

そうか、しのぶちゃんをどのくらい不幸にするか決めるのも私なんだわ…。

そう、しのぶちゃんなんて、親にめいっばい怒られればいいんだ…。

「早く帰ってきて、お願いね」

「そうだよ。しのぶちゃんなんて！おばあちゃん、じゃあ今から家に帰るからね…」

そうして、征子はすぐに行動を起した。

「おばあちゃんが大変なの！私どうしたらいいかわからない！しのぶちゃんも来てくれない！？」

征子は嘘をついて半ば強引に、しのぶをつれて家に帰ることにした。

「え！？なんでなんで！？」

しのぶはいきなりの事態にわけがわからずにいた。けれど、大変だと聞いて仕方なく、征子の言葉に従った。

しのぶはただ征子のお婆ちゃんが具合が悪いと聞いて、何も知らずともかく焦って一緒に来てくれたのだった。

そして、今度は征子の家に向かい、帰り着くと、具合の悪そうな振りをしている絹枝を前に、二人はあれこれと凍り枕を用意したり、絹枝の看病をした。

「病院に電話しないと！」

しのぶがそういうと、絹枝の健康状態の嘘がばれないように、しのぶに言った。

「いえいえ、もう大丈夫よ。随分楽になったから、今から病院に行く用意をして、バタバタするよりは、横になった方が楽だから。」
絹枝はだんだんと具合が良くなってきたと嘘を並べて、普段のような穏やかな顔を浮かべた。

その後、簡単な食事を征子としてのぶで作り、みんなで料理を食べな

がら、しのぶの家から持ってきた映画を観たのだった。

三人は、映画を夢中になって観た。やがて、映画の終わる頃には、知らぬ間に夜の１０時を過ぎていた。

けれども、その部屋の時計はまだ８時３０分ほど。

しのぶは征子に映画の感想を求めた。

「面白かった！征ちゃんはどうだった？」

「うん！面白かった！あれ？しのぶちゃんはまだ観たんじゃなかったの？」

「ううん。いつも観ようとしても遅くなっちゃって、親が寝なさい寝なさいってうるさいの」

「そうなんだ」

「ところでおばあさんはもう具合大丈夫ですか？」

「ええ、おかげ様でね。映画もとっても面白かったわ。ところでしのぶちゃん。そろそろ帰らないと行けないんじゃない？」

「はい、私の家門限９時なんです！まあ、ちよとくらい遅くてなくてもいいんだけど」

「あらいやだわ！ここの時計すごく狂ってて、今１０時過ぎてるのよ」

「ええ？や、やばい、どうしよう！？」

としのぶは悲鳴のような声をあげた。

そして、あわてて家に電話をかけたのだった。

電話をかけてみると、しのぶのご両親はえらく剣幕で、しのぶに対して怒鳴り散らしていた。

しのぶは泣きそうな顔になりながら、ごめんなさい！と謝って、様々ないいわけを並べてみたが、しのぶの両親は聞く耳を持たない様子だった。

そこへ絹枝がそつと近づいて、

「しのぶちゃん、良かったら、お婆さんに少し代わってくれないかしら？」

しのぶは助けを求めるように、そつと絹枝に受話器を渡して、絹枝

に説得してくれるよう、目で哀願した。

「もしもし、私、辻山征子の祖母で絹枝と申します。いつも孫がしのぶちゃんにお世話になっております」

すると、相手は、自分よりもずつと年配の年寄りが丁寧な挨拶で出た為、少し冷静になり、そちらも丁寧な辞令をのべる。

「いえいえ、こちらこそ娘が遅くまでご迷惑をおかけしました!」

「とんでもないです。実は先ほどまで、私の具合が優れませんが、孫を含めて、お宅様のお嬢ちゃんさんに看病して貰っていたんですよ」

「む、娘がですか?」

「ええ、しっかりした優しい子ですね。だからお嬢さんはちつとも悪くございませんのです。それに、私の家の時計の電池が古くなっってしまったいて、時間が止まっていたのも本当のことですから、悪いのは私共です。今度孫にお詫びをさせにむかいますから、大事な娘さんの安否を心配させてしまったことどうか許してくださいな」

「そんな、こちらこそ理由がわかって少しほっとしました。お詫びなんてそんなこと気になさらないでください。ところで、具合が悪いと言っていました、大丈夫ですか?もし、何かあった場合、教えてください。私達で良ければ、お手伝いしますよ」

「優しい真心ありがとうございます。本当なら、私自身がお詫びにいたらよろしいのですが、持病で足が弱くて、時々目眩を起して倒れることもありましてねえ」

「そうですか…」

絹枝の相手の心を掴んだ絶妙な切り替えしだった。

そんな風にして、絹枝は征子と、征子の能力で、不幸にさせられそうになった相手とを、上手くかばっていった。

征子はその温かな絹枝の優しさの中で、少しずつ能力を制御して、成長していったのだった。

けれども、絹枝には家族がいつまでたっても帰って来ない寂しさを少し感じながら。

また征子自身はそんな絹枝に対しての感謝と申し訳なさを感じながら、日々を暮らしていたのだった。

そうして、そのまま三年間もの月日が流れた。

征子が、淡い初恋を感じたのは、その年の高校2年生の時だった。その相手は、金上情一と言う名前で、成績がよく、運動神経も良かった。

また、顔もそれなりに男前だったが、性格があまり良いとさえ言えず、人を見下したり、弱い者を虐めたりもする。

征子は、ふと金上を思い知らせてやろうと企んだことから、だんだんと意識をするようになっていった。

ある時の部活で、金上情一はメンバーが弱いからという理由で、チームに入りたくないと言ったことがあった。

その時、征子の親友の中山しのぶがそれを注意したのだが、全然聞こうとしなかった。

そして、征子が金上に言っただけだったのだ。

「あなたにいくらすごい能力があっても、チームから抜けて一人でいるようだったらその力なんて無いのと一緒にじゃない？少なくともやる気のないあなたより、他の人の方が、シュートを決めれると思うけどな」

「ふん、じゃあ、このバスケでスリーポイント勝負して、俺に勝てる奴が一人でもいたらチームに入っただけでもいいぜ」

「逆でいいわよ。あなたが誰か一人にでも勝てたら、自由にしたいわよ」

「ああ！」

金上は怒りを顕わに征子に眼を飛ばした。

「二本ずつシュートして、ゴールポイントの多い方が勝ち、勝てたら、自由だから、同点はあなたの負けとする。あなたが勝ったら、私が裸でトラック10週してもいいわよ」

そして、急遽ゲームが始まったのだ。

男共は、征子が脱ぐと言った為、金上に味方しだして、金上を応援するものまで出た。

征子は金上が運悪く、誰とやってもポイントで負けるように想像した。

そして、金上は一人ひとりとスリーポイントのゲームをしたのだった。

金上は全国大会に出ることが出来るほどの腕前で、誰もがそのゲームを金上に軍配が上がると思ったが、実際やってみると、征子の言うように、金上は誰とやってもポイントで勝つことが出来なかった。ど、どうなってんだよ！

一人一人ゲームが終わるにつれ、金上は焦っていったが、誰からも全然ポイントをリード出来なかった。

そして、最後、一年生で一番運動神経の鈍いといわれている武山修汰とゲームが行われた。

征子はその一年の子に頑張つて！と声をかけた。

けれど、周りは、武山みたいなへたくそが勝つなんて思ってもいなかったし、征子が脱ぐことを望む者は、武山に負けるようにブーイングを飛ばしたりもした。

結果、最初に金上が1ポイント決めたものの、武山が奇跡的にも2ゴールとも決めて、金上の負けが決定した。

「く、くそ！！！！どうなってんだ！？」

「じゃあ約束どおり、チームに入つてね」

「くそ！わかつたよ！入ってやるよ！」

金上が剣幕にそう言うのと、バスケットの部長、新崎卓也が

「いや、入らなくていいよ。誰にも勝てない奴をチームに入れるわけにもいかんだろう」

と冷静な口調で厳しく言っただった。

それから、金上はどんどん肩身が狭くなっていき、さらに追い討ちをかけるように、勉強の成績さえもどんどん悪くなる始末だった。けれどそんな中、後輩の武山が金上のことをずっと励ましてやって

いたのだった。

金上はそれに最初腹を立て、武山を殴ったり暴行を加えたのだったが、真剣に金上の運動神経などのセンスをかつていた武山はひるむことがなかった。何度も武山だけが金上に激励をしたのだ。

「先輩は神のセンスを持つてるんです！僕は先輩みたいになりたくてこの部活選んだんすよ！頑張ってください！」

金上が何度もそれに腹をたてても、武山はいつも同じように笑顔で、尊敬の眼差しで言うのだ。

「大丈夫っす！今は運が悪いだけっすから！」

「先輩がいないと全国勝てないっすよ！」

そして、ある時にそんな風景を征子が見たのだった。

どんな不幸な目にあってもそこから立ち上がろうとした金上の執念はすごかった。

また、武山のおかげか、金上は前のような粗暴さもなくなって、顔の表情も強く、優しくなっていたのである。

ふと征子と、武山が体育館で二人きりになったおりのこと、武山は征子にこんなことを言った。

「金上先輩ってどう思います？」

「え？そ、そうね、なんか少し変わった気がするかな」

「俺、金上先輩に憧れてここに入ったんす。でも、実力があるのにほんと運ないんすよね」

「そ…そうね」

「辻山さんって、金上先輩のこと好きなんすか？」

「え！？何言ってるのよ！」

「だって、よく先輩のこと見てるじゃないですか」

「…、また生意気な態度とらないように監視してるだけよ」

征子は冷たく言ったが、内心ヒヤツとした。

「大丈夫っすよ！今の金上さんすげえ優しいんすから！」

「…」

「あ、あのそうだ！もし良かったら放課後に校舎裏で待っていてくれ

ないっすか？」

「え？なんで？」

「お、俺、はつきり言いたいことがあるんすよ！お、俺今も辻山さんが金上先輩のこと好きなんじゃないかな？って思ってるんすけど、やっぱりいくら憧れてる先輩って言ってもその先輩に負けたくないっすから！」

…スリーポイントの時、応援してくれて嬉しかったっす！」

武山はそう言うところくさと体育館から出ていった。

征子は、武山が指摘した通り、どんどん優しく強く変わっている金上に惹かれていたのだった。

けれど、金上のその変化が、金上のことを心から尊敬し、希望を与えていた武山に支えであることを感じ、また、ストレートな告白を受けて征子の気持ちが揺れた。

けれど、征子は異性と関係を持ち、ふとしたことで、不幸にしてしまうことを恐れたのだった。

金上に対してはさんざん不幸を与えたものの、彼は憧れであって、本気で誰かと恋愛しようなどと征子は思いもしなかった。

本当に恋に落ちるのがどれほど危険かを知っていた征子は、真剣な愛情から逃げるように、金上に憧れを抱いていたのだった。

そこへ武山の告白である。

征子は相手も傷つけぬ為に、その待ち合わせを無視して家に帰ったのだった。

……

「…そう、で、行かなかったのかい？」

と絹枝は言った。

征子は、自分の気持ちを絹枝に見透かされたことに気付き、告白の話をしたことを少し後悔した。そして、出来るだけ明るい声で、「いい、いいのよ。だってその子、私の好みじゃなかったし。それに

私その子に校舎裏に行くなんて約束してないもん」

「ほんととは征ちゃん、その子のこと嫌いじゃなかったでしょ？でも、征ちゃんは優しいからその子を守ってあげた」

「…おばあちゃんはなんでそんなすぐに人の気持ちがわかるの？私もう部屋に戻る！」

「そうかい？ほんと優しい子だね。征ちゃん」

征子は、絹枝に内心を見透かされてしまい、機嫌をそこねて、部屋に戻って来ていた。それは、一緒にいて、ちょっとしたことで、絹枝が不幸になればいいのというような気持ちを出さない為だった。征子は、ベットの上で、出来るだけ何も考えないように努めた。

その時、征子の携帯電話が鳴った。

知らない番号で、出てみると武山からだった。

「どうしたんっすか！待ってたのに！」

「え！？武山君！？どうして武山君私の番号を知ってるの？」

「前田純也から聞いたんすよ」

征子はその名前を聞いて驚いた。そして、身体を硬直させた。

何故なら、その名前は中学校の時に屋上で死んだ生徒の名前だったからだ。

「ど、どうして!？」

「いいかげん許してくれないっすかね？金上先輩だって十分反省してるんだし、もう前のように普通にバスケさせてもいいんじゃないっすかね？それに、前田純也だって、ちよつと煙草すったくらいでから頭を碎かれて酷くないっすか？俺だってちよつと逆らったからって、母親に殺されて！罪があるっていうんなら辻山さんだって自分の家族を消して、大事なお婆さんを苦しめているっすよね！？それはどんな罰を受けるつもりっすか!？」

征子は恐怖に気が侵されて電話を切り、投げ捨てた！

ブルルルルル！

ブルルルルル！

携帯電話のバイブが布団の上で小さく音を立てて、征子を責めた。

やがて、留守電に切り替わり、母の声が聴こえる。

「征ちゃん？ここはどこなの！？私達は何処に消されたの！？」

征子はガタガタと震えた！

そこへ突然に眠気が襲ってきて、征子の意識が朦朧としてきたのである。

その様子をずっと見ていた絹枝は、征子に近づいて、包丁で征子を刺した。

絹枝は泣きながら、

「私の家族を返しなさい！私の家族を返しなさい！私の家族を！」と、そう言つて、何度も征子を刺した。

征子は薄れていく意識の中で、ふと考えた。

私がお婆ちゃんの愛する子供を消してしまったのだから…、私なんてお婆ちゃんに殺されるべきなんだ…。

やがて、絹枝は孫の残骸を見てこう言つた。

「征ちゃん…どうしたの？征ちゃん！？どうして！？どうしてなの！？私は征ちゃんを許していたんだよ！」

絹枝は、家族がいなくなつてからというもの、孫の征子と二人だけになり、どんどんと二人の関係が深くなるのを感じていた。

そして、時に、本当に親友と思えるほどに、仲良く喋り、お互いを支え合つてきたのだった。

だからこそ、絹枝は征子が持つ闇を取り除いてやりたかったのだ。

その為、絹枝は身を削るようにして、征子の心に深くそつと入り込もうと懸命になつていた。

絹枝は心深くから祈つた。

この残り少ない寿命で全ての罪を説き、また生まれ変わつて、全てが幸福であるようにと、

「…何も悪いことをしたからつて、自分を責めなくてもいいんだよ。みんなそれぞれに色んな立場に立たされる。時には人を傷つけてしまったら、時には弱さのせいで、辛い時を過ごすこともあるだろう…それでも最後まで諦めたら駄目なんだよ。」

不幸にも、幸福にも人の命を一生懸命にする働きがある。
生きるっていうのはそれでいいんだよ。

また生まれてこようね。征ちゃん。

みな互いを助け合っている。

深い縁を持つて生まれている。

どれほどに僅かなつながりさえも、深く繋がりがあって、それは何物にも代え難い生きる幸福を大きくしているの。

征ちゃんまた一緒にお喋りしようね」

そうして、絹枝は大好きな征子を抱きしめながら、次に一緒に生まれて幸せになることを征子に約束して、息を引き取っていったのだ。
った。

了

（後書き）

読んでいただき本当にありがとうございます！

普段はコメディーしか書きません。

が、もっと本当に面白いコメディー小説を読んで欲しいので、たまにはホラー小説の読者様にご挨拶と思いました。

これから執筆をずっと続けていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725f/>

地獄に落ちろ！

2011年1月27日14時33分発行